

事さぶをお耳にある。

學外からは尾上八郎先生（女高師）と保科孝一先生（高師）がお見えであつた。尾上先生は古今、新古今、万葉の順で本科一、二、三年をお教え下さつた。まるで漫談で私共は大いに不平であつた。今思うとしかしその漫談にも抑すべき滋味があつたようである。保科先生は国語學關係の御講義をお持ちで、一度もお笑いになつたことがなかつた。当時のノートで今でも私の座右にあるのは山口先生の文学史と保科先生の国語学である。佐々木八郎先生の御講義はほんの一年違いで私共には聞く機会がなかつた。

総じて私共の国漢科時代でも、訓詁第一主義の長い伝統を逸脱してはいなかつた。おかげで古典の讀めない国文科生というそしりを受けることからは一応免かれ得たが、文学としての扱い方や批評鑑賞の方面はやや食ひたりなかつた。

時代の險しさは左右学生の対立が中央校庭で血を流がしてゐた。私共は胸に鬱屈したものを感じながら、今日、歴史社会学派と呼ばれる研究の仕方は學べなかつた。私共のなかでそれを求める者は自分で考へてみるよりほかなかつた。私個人のことといえば、みだされぬものを求めようとしながら、つまらぬ同人雜誌をやつてみたり、某氏の門下で安易な詩をつくつてみたり、また一方、大学新聞の編集に携わつて思想の激蕩に身を任せたり、まことに支離滅裂であつた。

今でも思ひ出すのは永井先生がある時、珍しく激した声で「小説を書きたいものは文学部へゆくことです」といわれたお言葉であつた。私はそれをまことに意味深く聞いたが、一寸さびしくもあつた。ここにいっても小説を書いてみせる、といつて在学中ずつと小説修業を続け、卒業してから一流雑誌に作品を発表するところまで行つた友人が二人ほどいたが、大成しないまま死んでしまつた。

## 恩師の思ひ出

小路 一光

（昭和十年卒）

私は昭和六年から十年まで、現在の教育学部と同じ場所にあつた本造二階建の古びた校舎で四ヶ年の学生生活を過ごした。

四ヶ年を通じて、教室で最も接触の多かつたのは、永井・松平・竹野三先生である。従つて私共が三先生から受けた影響や感化は色々な面に於いて一番深く又師範部の一つの學風を代表するものはこの三先生であつたと言つても過言ではないと思う。永井、松平両先生とも、当時既に老齡の域にあられたが、その講義はまさに仕者を凌ぐ發刺さで、熱の籠つた甲高い力強い声は、私共一人一人に迫つて

来る感がした。この誠実な真剣味溢れる授業を通して、私は教育者としてのあるべき態度を無言の裡に教え込まれた。而してその講義も一字一句笑に懇切丁寧を極めたものであつた。永井先生の「なんとマア、……」であらうことよ」の解釈調は今だにはつきり耳の底に残っている。竹野先生は現在でも余り変らない様に思われるが、流石に当時は黒髪つや／＼として、精氣溢れる感があつた。平安朝の作品を通して、当時の社会風俗や人情の機微などを話される時は、先生御自身もほんとに楽しそうであつた。従つて教室全体は、いつも和やかな雰囲気包まれて、じかに先生の人間味そのものに触れる一種のゆとりさえ感じられた。私は先生から、永井、松平両先生とは又異つた意味に於いて、教育者としてのあるべき態度を得させられた。次いで接触の多かつたのは、五十嵐、佐々木、尾上の三先生及び牧野、原田両先生である。五十嵐先生の、あの抑揚の少い調子で長く続けて読み下す一風味のある朗読法や、坪内先生の名講義をまねてとおつしやるあの口語訳の名口調など印象深いものであつたが、特に私の心を打つたものは、黒い表紙が指で白くすり切れた源氏の講本に、赤青とりどりに細かな字で、ベッタリと註が書き込んであつた事である。従来ノートも持たずに滔々と一時間講義される先生に対して学生らしい畏敬の念を抱いていた私は、ここで改めて学問に対する学徒としての執るべき態度をしみじくと反省自戒させられたのであつた。佐々木先生は当時は黒

髪深々として、眼増越しに光る眼は、まさに精悍そのものの感があつた。その講義は、身振り手振り面白く、物語の内容をどこまでも立体的に学生の前に再現せられて、私共を恍惚とさせたものである。その綿密で、周到な教授法、生々躍動する講義振りは、今でも大きな魅力として私の脳裡に刻み込まれている。尾上先生からは古今・新古今及び万葉を教わつた。始終ニヤ／＼と笑顔を見せながら、歌を二回程繰り返し朗読されて、「うまく詠んだものですね」と独り感嘆されては次の歌に移るといつた風で、笑のところ私には何か奥歯に物の挟まつた感じであつた。そこで折々文学部へ窪田（空穂）先生の万葉の講義を盗聴しに行つたものである。その窪田先生からは、僅か江戸の和歌の講義を受けただけで終つたのは今でも残念に思い又不幸でもあつたと思う。牧野先生は私の在学中ずっと師範部の部長であられたが、南朝正統論の闘士であつたという青年の佛は全く消えて、文字通り好々爺といつた感じであつた。声の小さいのには一番閉口した。尚僅か一年乃至数ヶ月しか数を受ける機会を持たなかつた先生方の中でも、私に大きな感化を与えて下さつた事の数々は思出せば限りがない。老子を教えて下さつた桂先生は、中風のためかで右手の自由は殆んど失われ、御出講の時は人力車で通われて居つた程であるが、一度教壇に上られると忽ち生れ変つた様に元氣になり、大声叱呼、左手で卓を叩いての熱弁は、私共を思わずホロリとさせたものである。又椅子に腰を下して、

終始憂らぬ静かな姿勢と口調で、次から次へと一秒の間も置かず話し続ける岡先生の現代文学の講義、そこに含まれている先生独自の皮肉やユーモア、或いは茫漠として一見掴み所のない話の中に様々の示唆を与えて、国文学鑑賞の眼を開いて下さった山口剛先生の堂々たる風貌——和服姿——も忘れられない。その他理路整然として明解な講義をされた金田一先生、訥々とした講義ではあつたが、人間の豊かさを感じ親しみの持てた川田先生、その他思い出の糸をくれば、到底僅かな紙面では書き尽せない。顧みて多くの先生方から御教示を受けた様々の学問知識は、必ずしも現在明確な形をなして私の頭には残っていない。たゞ、諸先生から感受せしめられた真理探求への激しい学問的情熱と、人間育成への温かい肉親的愛情とは、私の心を常に励まし鞭つて下さる永遠の賜物であると信じている。そして教育とは結局こういうものであり、又こうあらねばならぬものだといつも自分の心に言い聞かせている。

## 空白の学生時代

興津 要

(昭和二十一年卒)

昭和十八年四月——すでに太平洋戦争の敗北必至を思わ

せる重苦しさが巷にみなぎりはじめたころ、早稲田におけるわたくしの学生生活ははじまつた。

学徒出陣、勤労動員、空襲、敗戦……わたくしの学生時代は灰色の戦争の思い出そのものと二重写しなのだ。あわただしかつた記憶の一瞬一瞬がぎれぎれに浮んでくる。そのとぎれとぎれのフィルムをモンタージュしながらこのノットはなされねばならない。

しかし、そのなかで、永井一孝、松平康国、勝俣銓吉郎などという高師部創設以来の諸先生方が、わたくしの入学早々、停年で御退職なすつた日の印象は妙に生々しい。薄暗い大隈講堂の椅子に背をもたせて、わたくしはそこになんとなく日本の歴史の一つのユマを感じた。

わたくしたちが満足に講義をうけることができたのは一年の時だけだった。それも秋に文科系学徒の徴兵猶予がなくなり、十二月にクラスの三分の一に近い人たちが姿を消してしまつてから後のことは、まづたくかすかにしか記憶の線に浮んで来ない。

伊藤康安先生の口角泡をとばしての、川田瑞穂先生のとつとつとした、横井鏖一先生の慎重きわまらない——それぞれ独特のお話ぶりがほおえましくよみがえつてくるし、岡一男先生の明治文学史もなつかしい。

竹野長次先生の伊勢物語、佐々木八郎先生の平家物語の二つはのこもし出す雰囲気が対照的で興味深かつた。

竹野先生の時間は午後の一時間目なので、風食に行つた